

森 幹郎における海外視察研修（1963年7月～8月；1969年2月～10月）の行程と成果の検証

○ 中京大学 中嶋 洋 (005048)

キーワード：森 幹郎, 北欧視察研修, 欧州視察研修

1. 研究目的

戦後日本の老人福祉行政施策に関し、各国関連資料の翻訳作業に精錬したり、ホームヘルプ・サービスの仕組みを詳解したキーパーソンとして森 幹郎（1923.5.29-2012.2.7,以下、森）がとり上げられることはあっても、二度の海外視察研修の内実やその過程において、彼が何を考え、どのような行動をし、帰国後、諸外国と日本との対比から何を感得し、異国の地での様々な体験や入手し得た各種関連資料の数々を法制化のためにどのように生かそうとしたのかまでは解明されていない。海外視察研修を通じ、「老人福祉、ひいては社会福祉への開眼を体験した」などと述べた森（1968:自序）が、「以来、社会福祉と人間の心との関わりの問題は、私にとって最大の問題になった」と論じた点についても十分に考究されておらず（同）、1960～70年代にかけて日本の老人福祉施策がいかなる理想像や基本指針の下に構想されようとしたのかの未来図が不鮮明なままとなっている。

以上のような問題意識の下、本発表では戦後日本の老人福祉行政施策の構想に寄与したキーパーソンの一人として森を位置づけ、諸外国から受けた影響を彼の思索及びとり組みの視点から明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

研究方法は、公刊の森の書籍・論稿などに加え、研究上のタイムラグを可能な限り縮減すべく、視察研修時の森が「旅先の各地から倉皇（ママ）のまにまに故国の新聞や雑誌に書き送った」原稿のうち（森 1970c:自序）、日本老壮福祉協会刊行の機関誌『老壮の友』に掲載された23本（「欧州だより」、第11巻第5号[1969年]～第15巻第6号[1973年]）など、極力、第一次資料に依拠するものとする。研究課題は、①海外視察研修以前の森の問題意識の所在の解明、②森が行った北欧視察研修（1963年7月～8月）の行程と成果の探究、③森が行った欧州視察研修（1969年2月～10月）の行程と成果の検証、④一連の海外視察研修体験から、1960年代の森が考証しようとしたことの究明の4点である。

なお、森自身は、1966（昭和41）年6月1日～14日の約2週間、日政援助の一環として、「老人福祉対策技術指導派遣」という形で沖縄県へ技術指導に赴いているが、諸外国から受けた影響に特化した本発表では対象外とする。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮しいは、「日本社会福祉学会研究倫理規程」に基づき、出典の明記に加え、個人

情報の保護に努め、研究倫理に十分に配慮した。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

森は、異国で物質的・経済的に保障され、漫然と佇む多くの老人を目の当たりにし、「必ずしも老人天国とは思えなかった」（森 1968:195-6）、「前者の轍をふむことのないよう」などと警戒心を強めていた（同）。加えて、表面的な物質面・金銭面のみならず、精神面や内面という内奥まで省察しようとし、日本の実情に見合った老人福祉の仕組みを構想しようとしていた。こうした背後には、「パンを保障されただけでは幸せになりきれないなにかが人間には残されている」などに象徴されるように（同:182）、森は、問題の根源に迫るべく、できる限り、現地人の生活や心情に接近しようと、自らデンマークの老人国民高等学校に入学したり、フィンランドのヘルシンキ大学社会政策研究所に入所し、他国の学びや老人対策の実態などを、体験的に学び取ろうとした姿勢が注視された。

また、社会保障を「それだけのことで、それ以上のものではない」などと断言し（森 1968:180-2）、制度・政策を限定的に捉えていた森だったが、そこには、遅れていた日本が闇雲に諸外国のあり方に追従することを戒め、共同体的相互扶助や家父長制家族制度などという日本社会に残存する独自性や特殊性をも考慮し、実験的試みとして、人々の精神面・内面や予防機能を重視しようとする彼の眼差しがあった。

5. 考察

「欧米＝優位、日本＝劣位」という欧米基準のみならず、今回、北欧・欧州諸国のなかでもとりわけ、後発地を含みつつ、森の一連の海外視察研修体験を彼の記録物から辿り直すと、「社会福祉のご用聞き」というソーシャルワーカーの役割や「ワンセット・システム」などの運営のあり方を西欧諸国から、老人リハビリテーション、センチナリアン、ホームヘルプ・サービス、老人福祉センターなどの実態を北欧・東欧諸国から学んでいたと看取でき、救貧的な日本に対し、防貧的な北欧・欧州各国からも参照しようと呼策されていたことが窺えた。森は、スウェーデン第三の都市であるマルモ市などを事例として参照し（森 1970b:27-8）、単なる借物ではなく実学として、日本社会に適合する具体策を考究しようとし、わが国の老人福祉施策の構築に寄与していく筋道を、こうした小規模な各種施策のとり組みから示そうとした。

本発表では、1963（昭和38）年7月～8月及び1969（昭和44）年2月～10月に実施された森による北欧・欧州視察研修の過程を、視察前の彼が注目していた「親孝行と政治体制の強固な結びつき」を問題意識の起点とし（森 1992:38）、日本社会の老人福祉施策の進化を図るべく、先進諸国の社会福祉制度のみにかぶれることなく（同:262）、老人天国が直面している問題や老乞食の群衆を見た旧ソ連での体験など、後発的な国々の実情をも捉え直し、わが国の老人福祉施策に教訓的に生かそうと考想していたことを示唆した。